

今回の「語ルシストの会」の事例報告の講師として、農福連携の優良事例として表彰された CoCoRo ファームの代表、堀川佳恵さんをお迎えしました。

堀川さんは、かつて教師として教育の現場に携わっていましたが、生徒たちの卒業後の進路や居場所について深く考える中で、福祉の分野に挑戦することを決意。「一般社団法人 STEP UP」を設立し、『家庭か社会、どちらかが楽しい居場所であれば、人は生きていける』という理念のもと、障がい者支援を実践されています。

具体的な事業としては、就労継続支援 A 型事業所「CoCoRo 事業所」、共同生活援助・自立準備ホーム「CoCoRo ホーム」、放課後等デイサービス「大地」などを運営。住居と就労という障がい者の生活における重要な要素を支援し、法人の理念を着実に実現されていることに深く感銘を受け、今回の講師をお願いしました。

福祉の分野では、支援への熱意が強い一方で、事業運営がうまくいかず、利用者の低賃金での運営を余儀なくされる法人も少なくありません。しかし、堀川さんは「ミッション（理念）とマネジメント（運営）」をしっかりと融合させることで、持続可能な福祉事業を展開され、利用者に適切な賃金を還元できる仕組みを築き上げてこられました。

教師から福祉事業への転身という大胆な挑戦の中で、事業や支援に関して多くの壁や課題に直面しましたが、職員や利用者と共に知恵を出し合いながら一つひとつ乗り越えてきたことで、今の評価があるということでした。

「利用者さんと一緒に成長している実感が持てて、とても楽しいです。」

「西都市の農家に一般就労として送り出し、地域貢献にもつなげていきたい。」
といった言葉を発信されています。

福祉の世界へ外から飛び込んだからこそ見える視点、そして強い思いを持ち続ける堀川さんの挑戦について、お話を伺うことができました。

<小林の所見>

福祉の現場に足を踏み入れると「それが当たり前」という世界に驚く。支援対象者との関係性など、どれもが暗黙の了解に支配されていて、長年その世界にいる人たちは、まるで空気のようにそれを受け入れていることに違和感を感じてしまう。

長くその業界にいるほど、人は無意識に“慣れ”に身をゆだねてしまうものかもしれないが、現状を変えるには、その“慣れ”を如何に克服して新しい関係性を作り出すか、それが支援者としての醍醐味だと思える。

変化が求められるいま、必要なのは「当たり前」を疑う視点かもしれない。

異業種から来たという“よそ者”の目は、時に冷たく、時に鋭く、けれど確かに、組織や現場に問いを投げかける力を持っている。

その問いこそが、福祉の現場にとって新たな発見や進化の入り口となるのではないだろうか。